

奨励賞 井上由美さん(北海道)

<母子家庭からみた、社会のいびつさ>

母子家庭になって初めて気づいたことがたくさんある。イクメンという言葉がもてはやされる現代でも、ほとんどの人が子育ては母親の役目だと疑いなく考えているということ。いまだに根強い母子家庭に対する偏見や不利益。母親ひとりが子どものしつけや教育、障がいまで全責任を背負わせられる重圧。そして社会の仕組みが生み出す母子世帯の貧困…。

親の経済力で子どもの将来が大きく左右される現状を変えるにはどうしたらいいのか。子育てを家庭だけに押しつけず、社会全体で後押しできるような制度とはどのようなものか。一つひとつ私自身の経験から考え、導き出した答えを整理して提示する。

また、生き方の選択肢が多様化しているにもかかわらず、女がしあわせになれないのはなぜかを考察。立場の違いを超えて女同士が連帯することの大切さを訴える。

奨励賞 多賀多津子さん(福岡県)

<日本社会の発展を担った「乗り合いバスの女車掌」(理不尽のなかで)>

昭和30年代の終わりごろまで、日本中で見られた「乗り合いバスの女車掌」。「発車オーライ」のかけ声とともに働く若い女性たちはバスガールとも呼ばれ、人々に親しまれた職業であった。しかし、その厳しい労働実態を知る人は少ない。

15歳でその職に就いた私は、当時の女性蔑視に翻弄されながら働いた。その会社のバスは、ほとんどが観光地を走るため、路線バスでありながら、名所旧跡へ差し掛かると切符を切りながらマイクを握りガイドも務めた事から「ガイドガール」とも呼ばれる特殊な職業でもあった。見習いの時、「気が効かない」との理由から途中で置き去りにされたり、またある時は深夜の峠道でぬかるみにはまって身動きがとれなくなったバスを引き上げてもらうために、どしゃ降りの雨の山道を駆け下りて電話を探したり。

現在では考えられない乗務体験は古い因習との闘いでもあり、ひたすら前を向いて進んだ青春の1ページでもある。